



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	スウィフトの思想的基盤(Ⅰ): 聖職者としての使命感について
Author(s)	竹市, 六也
Citation	[岐阜大学教養部研究報告] vol.[1] p.[83]-[89]
Issue Date	1965
Rights	
Version	岐阜大学教養部 (Faculty of General Education, Gifu University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/45940">http://hdl.handle.net/20.500.12099/45940</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

## スウィフトの思想的基盤 (I)

—聖職者としての使命感について—

竹 市 六 也

サッカリーのスウィフト論<sup>1)</sup>によって代表される、神の冒とく者としてのスウィフト観は、その作品中における神に対する冒とくの字句の末しょうに拘りて、その背後に潜む作者の真意を把握しようとはせず、後世の、かれの人と作品に対する根強い偏見を植えつけることとなった。かかるスウィフト観は、その後の、特に今世紀に入ってからの活発なスウィフト研究によって、大いに改められつつあるとは云え、いまだ十分とは云えない感がある。

この小論は、かかる方向への、一つの試みとして、従来正当な評価を与えられなかった恨みのある、聖職者としてのスウィフトの活動をあとづけ、それらの活動の背後に一貫して、聖職者としての烈しい使命感が伺われることを指摘し、スウィフトの作品理解への一つの足場を呈供しようとするものである。

### I

スウィフトは、かれの宗教に対する深い関心を初期のそして最初の大作「桶物語」(*A Tale of a Tub*)において表明した。いうまでもなくこの物語は、ローマ教会、英国教会および外国教派が烈しく相対立するにいたったキリスト教会の歴史を、それぞれピーター、マーチンおよびジャックの3人の兄弟に託して寓意物語とし、これを桶物語と題する本筋とし、さらに当時の英国社会、特に学界や文壇の腐敗に対して縦横に諷刺の筆を揮い、それらを本文の隔章毎に配列したものである。

この物語が初めて公けにされたのは1704年4月であったが、それに付せられている序文や本文物語中に言及されている事柄などから、実際に書きあげられたのはそれより7~8年前の1697年と断定して差し支えないようである。もし作者が何らかの動機で故意に執筆の時期を実際より早く見せかけようとしたとするならば、D.ニコル・スミス氏も考えるように、むしろかれが僧職についた1694年以前にまでさかのぼらせたと考えられるからである<sup>2)</sup>。

さて、今この桶物語が書き上げられたと思われる1697年の時点に立って作者スウィフトの過去をふり返って見るならば、1694年5月、当時27才の彼は、ムア・パークのウィリアム・テンプル家の書生生活から一たん独立を決心し、僧職の地位につくべくアイルランドに渡り、翌1695年1月にはアイルランド北部の町ベルファストの近くの片田舎キルルートの地に prebend の職にありついていた。

この時かれが聖職につく決心をするにいたった事情については、かれ自身の晩年の断片的自伝<sup>3)</sup>に次の如く興味深く語られている。即ち「スウィフト氏はしばらくウィリアム・テンプル卿のもとに寄寓した後、何とかして身を固めようと決心して僧職につく気持になった。だが先ず1692年7月5日オックスフォードの Hart Hall の学生として M. A. の肩書を取得した。かれの身代は乏しかったがそれにしても単に生活のために教会入りをすることに後ろめたさを感じていたところ、当時アイルランドの Master of Rolls の地位にあったウィリアム卿からその役所に年120ポンドの口の申し出でがあった。それをしおにスウィフト氏は生活

のために教会に追い込まれるのでなしに僧職につく機会を得たので、アイルランドへ赴き聖職につく決心であるとかれに告げた」のであった。

この自伝は、1727年即ち彼が60才の頃に書かれたと推定されており<sup>4)</sup>、記憶の誤りと思われる個所もすでに指摘されているとおりで<sup>5)</sup>この個所も筆者の30年以上も以前の記憶に基づくものである上、しかも筆者が事実をありのままに伝えているかどうかにも疑問の余地はあるであろう。しかしそれだけに却って筆者の生涯を通じての聖職に対する気構えがここに語られていると解釈することも可能であろうと思われる。

ともかく、ここに読みとられるものはスウィフトの生涯を通じて顕著な気位の高さと共に、僧職に対するかれの厳しい批判と自覚とであろう。われわれはここで特に当時の宗教界の沈滞と一般僧職者の道徳的頹廢ぶりを想起しなければならないであろう。

王政復古以来、宗教的情操はますます稀薄となり、英本国における高位の僧職は大部分が貴族の子弟の避難場所であり、下位の僧職者にいたっては精神的にも物質的にも質の低下が甚だしかった。その一端は当時の Spectator 誌やフィールディングの作品などにも登場するあわれな貧乏牧師などによっても伺われる通りであり、それはまた当時の漫画の好題材でもあった。

## II

さて、このような自戒を以てかれが1695年ようやく赴任することとなったその任地キルルートの実状はどうであったろうか。

地理的にいえば、このキルルートはアイルランド北部の町ベルファストから僅か数哩の所にあるが、Belfast Lough の波に洗われる荒涼たる僻地で、僅かに民家が集まっているに過ぎなかった。国教会員は痛ましい程僅かで、“気違い牧師”が岸边へ行って水面に石をはねとぼしているのを見にやって来る群衆（といっても半ダースに満たなかったろう）を会衆に集めようとしても一向にききめがなかった、と今日にいたるまでその近隣の地に語り伝えられているということである<sup>6)</sup>。

しかもスウィフトの前任者ウィリアム・ミルンは不行蹟と怠慢のかどを以て罷免されていたが、そのかれはもともと長老派教徒で王政復古に際して国教に改宗したアルスターの少数の一人であった。アイルランド北部に位置するこのキルルートの近辺は特にスコットランド系の長老派教徒が大部分を占め、国教徒は数えるほどしかいず、国教派の牧師は上記の伝説のように気違い扱いされたことであろうと思われる。

単に会衆が集まらなかったのみでなく、教会そのものの荒廃ぶりは全く言語に絶し、教区によっては全く使用に耐えないものや、教会を全く持たない教区も少なくなかった。

かつて聖職者としてのスウィフトを詳細に検討したランダ氏も「スウィフトの生涯にわたる非国教徒との闘いにかんがみ、彼が長老派教会の長い歴史を有する教区において僧職の最初の経歴をふみ出したことは重要な意味を持つ<sup>7)</sup>」と述べている。後年スウィフトが「自分は、とっくの昔に教会やキリスト教に絶望していた<sup>8)</sup>」と述べた時、その脳裡の一隅にはこの時期のかれ自身の印象が深く刻み込まれていたことは想像に難くないであろう。

かくて赴任の際の高まいたる決意にもかかわらず、否、むしろそのためにこそ、早くもキルルートの絶望的な沈滞の気分には耐え得ないで、かれはこの地にあること僅か一年足らずで、翌1695年5月には、後事を分別のあり、また敬けんでしかも多くの家族を養わねばならなかった友人ジョン・ウィンダーに託して英本国に引きあげ、再びテムブル家に身をよせること

となった。

しかし正式にキルルートの僧職辞任の手続きがなされたのは翌1697年12月のことであり、一説にはかねてテムプル家で面識を得ていたサンダーランド卿のもとにいよいよ政治活動に入る目的を以てとった手筈が12月が終わらない中に当のサンダーランド卿の失脚によって目的を果さなかったと見られている<sup>9)</sup>。しかし、この時サンダーランド卿が果してかれに政治家としての地位を約束していたのか、或いはそれが英本国で別の僧職の地位であったのかは断定の限りではないようである。

間もなく(1699年1月)ウィリアム卿の死去に際して姉のジェイン・スウィフトがいとこのデーン(Deane)に書き送った手紙の文句は次の如くであって、少なくとも彼女は弟のスウィフトが政界に入ることに對しては全く関知しなかったことを示している。即ち「ウィリアム・テムプル卿は生前彼を大そう愛され、かれがムア・パークに留まるためにこの国(アイルランド)の僧職を止めさせ、英本国の僧職につける約束をされたのでした。でも死が二人の間を裂き、友も僧職も奪ってしまいました<sup>10)</sup>。」と述べているに過ぎない。前述のランダ氏もこの手紙にふれ、いずれとも断定を避けている<sup>11)</sup>のは慎重な態度というべきであろう。

ここで想像し得ることは、仮りにスウィフトがサンダーランド卿のもとで、政界での活躍を夢見たとしても、恐らく教会との訣別を意味するものではなく、キルルートにおける国教の惨めな状況を目のあたり見て、それを救うものは政治以外にはないことを痛切に悟ったからに外ならなかったであろうということである。後年のアイルランド教会のための献身的活動並びにアイルランドのための愛国的運動が示すように、不幸な現実を目前にして徒らに傍観することは元來かれの性ではなかったのである。

ともかくこのキルルートの体験を契機として、かれの聖職に対する使命感はかれの心に深く刻みつけられ、はっきりとした目標と形をとって以後のかれを導くこととなったと考えられる。この意味において短期間とはいえ、このキルルートの体験はスウィフトの生涯にとって極めて重要な意義をもつものというべきであろう。

### III

さて、この間主としてかれの脳裡を占めていたものは何であったか。本論の冒頭において見た如く「桶物語」は1694年アイルランドで僧職を体験し1696年尚現職のまま任地を去って一たん英本国に帰っていたその当時のかれによって書き上げられたことは確かである。そしてキルルートにおける僧職の体験と「桶物語」との関係は単に在任の時期と創作の時期が密接に相前後しているばかりでなく、物語中のジャックはその作者がキルルートで痛切に体験した非国教徒によって裏付けられているのみならず<sup>12)</sup>、更に「桶物語」そのものがこの非国教徒に対する強い反感を契機として年来のかれの宗教観が急速に一つの寓意物語として具象化されるにいたったものであることが想像される。

かつて青年、スウィフトは騒乱のため、学業中途にして英本国にのがれ、ムア・パークのテムプル家に寄寓することとなり、以後しばらくは将来に対する確固たる目的もなく、広範な読書や、ピンダリック風のOdeの詩作に熱中していたと見られるが、注目すべきことは、この間にもかなり烈しい宗教に対する情熱が絶えず心の一隅に燃えていたと思われることである。

それは、健康上の理由で一年ほどの間アイルランドで過ごした後、再び1691年夏、ムア・パークのテムプル家に帰った当時盛んにOdeの詩作にふけた中に、*Ode to Dr. William Sancroft* 一篇が見出されることによっても裏付けられるであろう。ここに讃えられているサンクロフトは云うまでもなく前王ジェームズ二世の時、かねて旧教を奉じていた王が旧教

徒と独立教徒を束縛する法律を廃止するため「免罪令」を發布し、これを強引にも国教の僧侶に命じて説教壇において朗読させた時、6人の僧正と共に勇敢に反対の請願書を王に提出し、ロンドン塔に送られ、裁判の結果却って無罪となったカンタベリーの大僧正であって、ウィリアム三世の治世中、再び「寛容令」に反対して“nonjuror”と呼ばれるにいたったが、真の英国教会の擁護者として自らを任ずるその毅然たる態度は遂に一貫して変らなかつた。

この詩は1689年或る僧正の求めに応じて書かれたとされているが、XIIの節からなる260余行のOdeでサンクロフトを讃える高邁な精神は全体に漲っている。1710年スウィフトは「桶物語」第5版の出版に際して、新たに冒頭につけ加えた「作者の弁」において、「この物語は英国教会をその規律の点でも教義の点でも他のどれよりも完全なものとして讃えたものである」と強調しているが、かれの国教に対する感情は上記のOdeが示す如く、すでに早くかつ根深いものがあつたのである。

では一体かかる早くからの国教に対する情熱はいかにしてかれに養われたのであろうか。前述したように1688年英本国に起つた革命の余波を受けて、アイルランドは宗教的な対立に基づく騒乱の場と化し、スウィフト自身はダブリン大学におけるM.A.の学位取得を断念して英本国に難をのがれねばならなかつた。アイルランドはもともと旧教徒の勢力が強く、英本国革命の報はかれらの対立意識を刺戟し、旧教徒は各地に蜂起し、スコットランドおよび英国系の新教徒は身の危険にさらされるにいたつた。1689年にはフランスのルイ14世から軍隊と金を貢がれたジェームズ王は自ら渡来し、旧教徒を援助し、翌1690年にはこれに対処すべく、ウィリアム3世も自ら渡来し、いよいよアイルランドは戦場の巻と化するにいたつた。

アイルランド生まれの英国人として幼少時代から新旧両教徒の感情的対立の雰囲気の中に育ち、遂には旧教徒の暴動のために不安な将来に胸を痛めつつ英本国へのがれねばならなかつたかれが、それだけでも生涯烈しい旧教憎悪の念に燃えたたしめるに至つたことは想像に難くないであらう。

しかしスウィフトの場合更に国教擁護の闘士としての情熱はかれがすでにこの世に生まれ出る前に遠い祖先の血を通して彼に流れ込んでいたのである。

即ち、かれの自伝によれば、祖先は英国ヨークシャーの旧家でチャールズ1世の時代にViscountに叙せられた通称“CavalieroのSwift”を初めとし著名の士が多く、またわがスウィフトの直系の先祖はエリザベス朝末期からジェームズ1世の時代にかけて、カンタベリーのprebendの職にあつたウィリアムであり、このウィリアムは“いくらか名の知られた”聖職者で、かれの説教の一つは今日も尚現存し、Bodleian Libraryのカタログにはその題目が載っていることが得意気に記されている。(尚このウィリアムの父トマスもSt. Andrewsの説教者であつた<sup>13)</sup>)そしてその息子グッドリッチのvicarトマスこそはわがスウィフトの最も尊敬し、また誇りとする祖先の一人で、かれにとっては直系の祖父にあつてゐた。

この自伝は文字通り断片にとどまり、殊に末尾の1700年から1714年にいたつては全くメモの体を出でないものであるが、この短い断片的自伝にもかかわらず上記の祖父トマスに関しては極めて詳細に語られてあり、議会派側の軍隊の野ばんな度重なる(36回乃至は50回とも伝えられる)残酷極まる掠奪に勇敢に耐え、ひたすらチャールズ1世にその身を挺して忠勤を尽した様子などがさながら1篇のロマンスの如く生き生きと語られており、スウィフトが如何に感激を以て書き記したかを示している。

この勇敢で熱烈な王党派であつた祖父トマスは革命の進展と共に数ある王党派の聖職者の中でも真先に僧職を奪われ、ラグランドの城に長くとらわれの身となり、財産は没収される

の憂き目にあった上、王政復古を待たず、1658年5月2日63才で不幸な生涯を閉じたのであった。そしてこの勇敢な祖父トマスの行為は、スウィフト家にとって大きな誇りであると共に、それは後に残った数多い子女たちにとっては不幸な生涯の初まりをも意味した。以後のスウィフト家に清教徒に対する反感が根強く植えつけられたのは当然であり、特にその性情においてこの祖父と似通った点が多かったわがスウィフトに与えた精神的影響は大きかったであろう。しかもそのスウィフトが祖父と同じ聖職の道を選んだとすれば、かれには常人の場合とは異なった悲壮な、いわばある使命感が最初からつきまとっていたこともまた想像に難くないであろう。

殊に前述の如く聖職者として初めて体験した地、キルルートの不毛の状態を目の前にし、一方ではスコットランド系の長老派教徒と他方ではアイルランド系の旧教徒に圧迫されて衰微の極にあった当時の国教の現実を目撃し、かれの使命感はいよいよよきき立てられ、しかも今や現地における十分な資料を得て、ここにいよいよ「桶物語」の構想が急速に組み立てられていったと考えられるのである。

#### IV

以上「桶物語」に示された作者スウィフトの宗教的感情を跡づけつつ、ここに到達したわれわれは、次に目を転じて「桶物語」執筆以後のかれの行動を追って見よう。

かれは間もなく唯一の頼りのウィリアム卿に死なれ、王ウィリアム3世が卿の生前に約束してくれていた筈のカンタベリーもしくはウエストミンスターの prebend の職を得べくロンドンに出て、人を介して王に請願したがその請願は王のもとまでさえも達せず不成功に終り、止むなく Lord Justice の一人としてアイルランドに赴任することとなったパークリー伯の招請に応じて再びアイルランドに渡り、不快な人事の後、結局はララカーの vicar の地位が与えられることとなり、その地位は1714年 St. Patrick の dean としてアイルランドに永住の余儀なきにいたるまで続いたのであった。

この間注目すべきことは、ララカーの牧師となって間もなく初めて政治問題に関するパンフレット (*A Discourse of the Contests and Dissensions between the Nobles and the Commons in Athens and Rome. 1701*) をロンドンにおいて出版し、政界の注目をひき、以後 Whig 党の要人と親しく交わるに至ったことである。これは、時の上下両院間の党派葛藤を古代ギリシャおよびローマの政状に託して、諷刺したもので、当時苦境にあった Whig 党の陣営にとっては好都合のものであった。しかしこれを以て直ちにかれが政治問題に身を投じたものと断定するのは早計であろう。

前述した如くキルルートの僧職体験後再びテムブル家に寄寓しておのずと政界の動きに通じていたかれは、更にアイルランドに赴任後パークリー家の社交的雰囲気の中で、英本国の事情には明るくなっていた。かねて英本国に僧職を得ることを念願していたかれにとって、英本国の政界に認められることは自己の目的達成のための手段でもあった。パークリーによって僧職を得たかれは更に政界に働きかけ、その立場を有利に展開しようとしたことは当然であろう。

また後にかれがパンフレット作者として政界に名をなし、一方ではアイルランド国教の闘士として英本国の政界に奔走するにおよび、従来支持していた Whig 党が、非国教徒に寛大な方針をとり、且つかれがそのために奔走していたアイルランド教会の保護金制度の期待が絶望となるやかれはいさぎよく Whig 党を去り、その実現を確約した Tory 党に転じた。スウィフトはいまだかつて政治のために宗教的立場を犠牲にしたことはなく、この時もかれを

して政治的変節をなさしめたものは、何よりも先ず聖職者としての使命感であったと考えるのが素直な見解であろう。かれはこれによって政治家としてではなく、聖職者としての使命を貫き得たのである。

もともとスウィフトの社会問題に対する鋭敏な感受性と、生来の才筆とは、かれを聖職者としては必要以上に政治問題に介入せしめた感をまぬがれがたいが、このことは他面では宗教活動においても徒らに抽象的な教義を論ずるよりは現実的な実際活動をその使命と信じたかれの性格を示すものである。なお政治上の党派的对立に対しては、常に一貫して強く反対を主張していたスウィフトの立場からすれば、この際のかれの行動は政治的変節と称されるものとは次元を全く異にする性質のものであったというべきであろう。

また一般に流布されている見解として、当時のかれの聖職の昇進を妨げたものは「桶物語」のためであるとされているが、むしろ真相はこの頃かれが Irish Test の撤廃を期する Whig 党の方針に協力しなかったためと考える方が事実在即しているのではなからうか。ミドルトン・マリー氏はこの見解を支持しかれが出世よりも主義を重んじたことを強調している<sup>14)</sup>。

## V

なお最後に聖職者としてのスウィフトを考察する場合、晩年に至って或る書簡の中でかれが述べたことばは注目に価するであろう。それは本論中すでに一度引用した「自分は教会やキリスト教に対してとくに希望を捨てている」と述べていることばである。

アイルランド教会とスウィフトとの関係を詳細に検討したランダ氏は当然このことばに注目し、かれ自身の考察を加え「このことばは長い体験を経、諸原因の蓄積の結果到達した結論であった。アイルランドの国教に対するかれの pessimism を人間ざらいや一時的な憂うつ<sup>15)</sup>の反映と見るのは不当であろう。同様に単に個人的な、不遇な境遇の結果として見ることは、——たとえ個人的要素が幾らか働いているにしても——誤解を招く怖れがあるであろう。確にかれの僧職の全生涯を通じて、不満、挫折、絶望の気配は一貫して流れている。しかしもっとまじな別の見解がある」と従来の一般的見解と思われるものを批判した後「かれの絶望は主としてアイルランド教会の現実的な評価に由来するものであった。かれはアイルランド教会が歴代の掠奪により一般に衰微を来たしていること、教会内部の軋轢と外部からの攻撃に対する脆さ、またそれが依存しているアイルランドの経済的弱点に気付いていた。これらはそれだけでかれの pessimistic な態度を説明するのに充分である<sup>15)</sup>」と説明する。このランダ氏の見解は、いささか物質的要素偏重の嫌いはあるにしても、さすがに聖職者としての彼の立場をよく理解し、アイルランド教会の運命が自己の双肩にかかっていることを常に感じていた聖職者としてのスウィフトのよき理解者<sup>16)</sup>の見解というべきであろう。

もともとスウィフトの作品理解のための一つの重要な鍵でもあるかれの pessimism についての説明は容易ではなく、上記ランダ氏の指摘する如く、従来多くは余りにも作者の個人的な経歴と結びつけて解釈されて来た嫌いがある。上述のランダ氏の見解こそは、スウィフトがその本質において神の冒とく者であることとは程遠く、かれの生涯を常に重く支配していた pessimism の背後には、聖職者としての強い使命感が潜んでいたことを洞察し、指摘した一例に外ならないということが出来るであろう。

最近のスウィフト研究<sup>16)</sup>が、この従来軽視されがちであった聖職者としてのスウィフトを慎重に見直そうとする傾向が顕著であると思われることは何らかの形でこのランダ氏の見解を裏付けるものといえるであろう。

なお、本論の題名に充分答えるためには、かれの多くの著作物の内面からの詳細な検討を

必要とするが、それに対しては次の機会に試みることにしたい。

註

- (1) W.M.Thackeray : *The English Humourists of the Eighteenth Century* (1853) 中の1篇
- (2) D. Nichol Smith (edit.) : *A Tale of a Tub &c.*, 1958. Introduction Xliii-Xlv 参照。
- (3) Henry Craik, M.A.: *The Life of Jonathan Swift*, 1882. Appendix 1. *Fragment of autobiography*. P. 515.
- (4) 同上, P. 509.
- (5) 同上, P. 39, 脚註, 参照。
- (6) 同上, P. 51.
- (7) Louis A. Landa: *Swift and the Church of Ire'and*, 1954, P. 19.
- (8) Nichol Smith (edit.) : *Letters of Swift to Ford*, 1935, P. 169.
- (9) e. g. H. Craik, M.A.: *The Life of Jonathan Swift*, P. 60.
- (10) Thomas Roscoe (edit.) : *The Works of Jonathan Swift*, vol. II, P. 437.
- (11) L.A. Landa: *Swift and the Church of Ireland*, P. 24.
- (12) Nichol Smith (edit.) : *A Tale of a Tub*, Xlvii.
- (13) H. Craik, M.A.: *The Life o' Jonathan Swift*, P. 3.
- (14) Middleton Murry: *Jonathon Swift*, 1954, P. 106.
- (15) L.A. Landa: *Swift and the Church of Ireland*, Xvi.
- (16) e.g. Irvin Ehrenpreis: *Swift—the Man, his Wrks and the Age*, vol. I, 1962.  
Nigel Dennis: *Jonathan Swift*, 1964.